
夢列車

ランデブー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夢列車

【Nコード】

N6832C

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

夢列車は夜空を走る、皆が寝てる時に。でも乗車できるのは良い子だけ、だから子供たちはパパとママの言う事をよく聞かないと。小さな女の子さくらちゃんはずいぶん乗車する。

いち

チクタクチクタク

目覚まし時計は九時を指しています。

こどもはもうおねんねの時間だけど、ぬいぐるみが多いこの部屋には誰もいません。勉強机には書きかけの手紙、猫のキャラクターがスマイルをしている小さなテーブルには色鉛筆、ピンクのタンスの上に置いてあるのは値札が付いている真新しい洋服、そして一際でかい熊さんのぬいぐるみが、月の光で見えました。

一通り部屋を見終えて、そこでようやくベランダの存在に気付きました。そこは、小さな花壇が幾つもあったまるでお花屋さんのようです。寒空の下蓄のお花さん達に囲まれながら、白い息を出してほっぺが赤くて満天の星空を見上げている小さな女の子。彼女が、部屋の主であるさくらちゃんです。

「お星さんキレイ。でも、お月さんもつとキレイ」

イチゴの模様がとってもプリティーなパジャマ姿の女の子さくらちゃんは、ニコニコしながら言いました。

するとその時、ドアをトントンと軽く叩く音が聞こえました。

さくらちゃんはいつも通り

「どうぞです〜」と可愛らしい声で言うと、こまった顔をしたママがさくらちゃんと同じイチゴの模様がとってもプリティーなパジャマ姿で薄暗い部屋に入ってきました。

「また夜空を見ているの？ 毎日あきないわね」

優しい笑顔でさくらちゃんの横に立つと、ママも夜空を見上げました。

「お月様キレイよね。普段空なんてぜんぜん見ないから癒されるわ、たまには空を見るのも気分転換になって良いね」

ママを横目でちらっと見たさくらちゃんは、思い出します

神様が夜空という画用紙に、黒色の絵の具で真っ黒に染めたの。でもこれだけだと少し寂しいじゃんと思った神様は、黄色の絵の具でかわいく光るいっぱいのお星様と力強く光るお月様を描いて夜空を明るくしたのよ。

神様は夜空以外にも、青空とか夕焼けとか空をかき続けているの。

とママが頭をなでなでしながら言っていたのを。

「ママ、神様って大変ね。お熱があつたりしても画用紙に空をかなくちゃいけないし、年中無休ね」
あくびをしながらそう言ったさくらちゃんは、くしゃみをしました。

ハクチュン

「ありやりや。夜空を見る時は上着を着ないさいってあれほど言ったのに。さっ、もうネムネムになってるからあたたかい部屋に入りましょう」

ママはさくらちゃんの小さな右手をギュッとにぎりました。さくらちゃんは、サムサムなベランダとキラキラの夜空に左手をふってバイバイしました。

「ママ〜。おててが冷たいの、ほっぺも冷たいの」
「サムサムのお外にいたから冷たいのよ。お風邪がさくらを苦しめたら嫌だから、ハグよハグ〜」
ママは両手を大きく広げて、さくらちゃんに抱き付きました。

「あつたかいよ。ハグハグあつたかよ！」
「痛い痛い、やさしくハグよ！　じゃないとママ、イタイタだからさ」
「ごめんなさいですママ。やさしくハグハグ」
「そうそう。やさしくハグハグ」

チクタクチクタク

目覚まし時計は九時三十分を指しています。もう皆はスヤスヤと寝息をたてて寝ている時間なのです。
さくらちゃんは夢の世界へ遊びに行くために、夢列車に乗って出発しなきゃいけません。

きつぷはちゃんとお持ちですか？　よいどめ薬はちゃんと飲みましたか？　おやつは300円以内ですよ？　お弁当は忘れてませんか？　遅れるって班長に連絡しましたか？

「…………おやすみ」

ママはさくらちゃんのほっぺにチュッ。そして、頭をなでなで。足音をたてずに、静かに、慎重にドアを開けてゆっくり閉める。はあ、と大きく口を開けてあくびをしたママは

「私も寝よう」と呟いて自分の部屋に入った。

パチリ。

目を開けると、そこには列車がありました。この列車に乗って夢の世界へ行けるのは、車掌しゃしょうさんに夢切符を貰った良い子だけ。夢の世界に悪い子は行けないのです。

「急がなきゃ！でも久しぶりの夢列車だから少し緊張する」

ベンチであたふたしているさくらちゃんは、夢列車に乗車する為に切符を探しています。

「あれ〜？ポケットに入れてたのに、ないよ」

慌てふためき焦っているさくらちゃん。誰か助けてようと辺りを見回しても、人っ子一人いなくてあるのは大きな夢列車だけ。

「うう。切符、切符ない、夢列車乗れない……」

月の光に照らされた静かなプラットホームに、女の子の泣き声が響きました。その声は、寂しそうな感じがします。さくらちゃんが涙を拭こうとポケットからハンカチを取り出そうとしたその時。

「泣かないで。涙は悲しかったり苦しかったり嬉しかったりして感情が高ぶった時などに目から出るんだけど、君は今どんな感情だい？」

そこにいたのは、藤井ふじいと書かれた名札を付けていてお面も付けている背の高い不思議な感じがする人。

「あなたは、誰ですか？夢列車の運転手さんですか？」

「僕は車掌しゃしょうの藤井と言います。運転手さんじゃなくてゴメンね」

さくらちゃんの鼻から鼻水がたら〜。車掌さんの藤井さんは気付いて、ティッシュを胸ポケットから取り出します、ムラサキのハン

カチも。

「か、かんじょうつて何ですか？」

ハンカチで涙をふきふき、ティッシュで鼻水をふきふき、されて真っ赤になった目で藤井さんに質問。どうやら“感情”という言葉は、さくらちゃんには難しかったようだ。

「感情っていうのは、物事にふれて心の中に起こる喜び・怒り・悲しみなどの気持ちって意味だよ」

笑っているように感じたけれど、お面を付けているから藤井さんの表情はわからない。

「心の中の気持ち？」

「そうだよ。君の心は今どんな状態なんだい」

「私の心の中は、お天気が悪いの。大雨で雷がゴロゴロって大きな音をだしてるの」

「……そうか」

藤井さんは、さくらちゃんが今どんな気持ちなのかを理解し、小さな頭を大きなおてで優しくなでなで。するとさくらちゃんは、ニコリと笑った。

「にひひ」

「ふふ」

さくらちゃんの笑い声、車掌さんの笑い声が静かなプラットフォームに響く。

夢列車に、小さな女の子と背の高い車掌さんが乗車して、夢列車はゆっくりと動いた。

にい

ガタンゴトンガタンゴトン

夢列車は、空にしかれた光り輝く線路の上を走ります。脱線なんてしません、とっても安全ですのでパパとママも安心です。

窓の外には、お星様とお月様が夢列車を歓迎しているかのように輝いています。お星様は口元をゆるめてやわらかな表情で、何かを言っているような気もしました。

「心細くて泣いてる泣き虫ちゃん。横に座っているお友達が心配してるよ」

「お菓子はまだ早いですよ。あとで食べたくなくてもしらないよ」

「しんどそうな顔だけど大丈夫？無理だよって思ったらお面を付けてる人に言ってよ」

「危ないから手を外に出しちゃイケません」

お星様は、こども達に注意をしていたり心配していたり様々。お月様は、ずーっと上の空で笑っている。

「君の座席はFの13だ。さあ、皆が待ってるからお行き」

藤井さんは、人差し指をたててさくらちゃんの座席の方を指差す。

「……いやなのです」

さくらちゃんは、そう言って藤井さんの大きなおててを握った。

「さくらは、物知りな藤井さんにもっと色々な事を教えてもらいたいのです」

「皆と一緒にいるより、僕に教えてもらいたい？」

「そっだよー!」

その時夢列車は加速しました。少し揺れましたが、さくらちゃんはこのぐらいへっちらなのです。ママと電車に乗って出掛ける時、座らずに立っています、吊り革を握らず立っています。

「バランス感覚をきたえているのよ」とさくらちゃんは言いますが、ママは

「危ないし他の人の迷惑になるからやめなさい」と言います。

「わかった。そこまで言うなら僕は君の願いを叶えよう」

ちよつと待つてね、と言って近くにいたお面を付けている人に何かを話して急いで戻ってきた。

「あのお面の人は何者なんですか？」

「彼は、僕と同じ車掌さん。僕が君の面倒を見るからって言うてきたんだ」

「車掌さんですか」

さくらちゃんは、向こうにいる車掌さんを鋭い目付きで見た。次はあっち、その次はそっちを見て何かを考えた。

「車掌さんは何故かいっぱいいるんだ。僕は運転手を増やした方が良いと思うんだけどね」

藤井さんは何を考えているのかがわかったのか、優しく答える。

「えっ」

さくらちゃんは口をぽかんと開けて、ビックリしている。

「さて。揺れて転けたら危ないから座ろうか」

「きたえているから大丈夫だよ」

列車は大きなカーブを走ります。車掌さん達は、危ないから立たないように！ と大きな声で皆に言っています。皆は、元気な声でハイって手を上げています。良い子だね、きつとパパとママの言う事をちゃんと聞いているんだな。

「わあっ！」

さくらちゃんは転けそうになったけど、藤井さんの大きなおててが小さな右手を優しく握った。

「ね、危ないでしょ。頭を打ったりしたら痛いから座ろっね」

「おかしいな、週に三回はきたえてるんだけどな、何ででしょ？」
ハテナマークを頭の上に出しているさくらちゃんを、車掌さんはほほ笑みながら見ている。

「何で笑ってるの？ 歯にノリが付いてますか？」

さくらちゃんが初めに木造のベンチに座り後から藤井さんが座った。紳士的だ、レディーファーストだ。

「僕は週に五回きたえていたよ」

夢列車から、こども達の笑い声が聞こえてくる。アハハ、ウフフ、イヒヒ、笑い声にも色々あるんだなと思いつつながらノートにカキカキ。

「えっと。アハハが大きく口を開けて笑う、ウフフがお上品に笑う、イヒヒが奇妙に笑う」

「君はお利口さんだね。忘れないようにノートに書き残しておくなんて」

藤井さんは優しい口調でノートを見る。ノートは真っ黒、こんなにカキカキしてるなんて偉い子。

「ママが、心に残った事をノートに書いたら思い出になるって言うてたの」

「良いお母さんだね」

ノートから視線を前へ。さくらちゃんは書き終えて、藤井さんを見る。

「……」

藤井さんは目線を下へ。

「元気ない？ さくらのせい？」

「そうじゃない。君は悪くないから安心して」

「じゃあ何で落ち込んだの？ 悩んでいる事があつたら、叫ぶか」

誰かに話してスッキリした方が良いつてママが言ってたのよ!」
「そうか、一人で悩むより誰かに話した方が楽になるのか……」
ゆっくりと視線をさくらちゃんに。

「じゃあ君に一つ質問するから、正直に答えてね」
「ハイ!」

さくらちゃんは元気な声で右手を上げた。

「君は幸せかい?」

「うん! さくらは、とつてもとつても幸せなの。パパにママにお
ばあちゃんに犬の太郎にお友達に先生に、皆優しくて大好き」

ニコニコしているさくらちゃんは楽しそうだ。

「そうか。君は幸せなのか、不平等だな」

そう言った瞬間、周囲が突然歪んだ。

「アレを見てごらん?」

右の方には、幸せなさくらちゃんの色んな笑顔が映し出されてい
る。

嫌いなピーマンを食べてママに誉められた笑顔、欲しい物を手に
入れて嬉しくて笑顔、おばあちゃんの話してくれたお話が面白くて
笑顔、犬の太郎が可愛くて笑顔。

「じゃあ今度はコレを見てごらん?」

左の方には、まるで生気を抜き取られたような悲しい目をしたこ
どもたちが映し出されている。

機関銃を持った少年、大勢の人達と一緒に密室に閉じ込められた
少女、親の暴力によつて精神的・肉体的に傷ついている少年、真っ
暗な病室から哀しげな目で月を見ている少女。

「この二つを見て君はどう思うのかな?」

藤井さんは前を見ながら問う。壁に掛かった人魚の絵画を見てる
ような感じはしない。

「さくらだけが笑っていて、皆は悲しんでいる……」

うつむきながら小さな声でそう言った。

「この世界は平等じゃなくて不平等なんだ。健康な人がいれば病気の人もいる、お金持ちの人がいれば貧乏な人もいる、前を向いている人がいれば後ろを向いている人がいる。このように、幸せな人がいれば幸せじゃない人もいるって事を覚えておいてほしい」

藤井さんは、さくらちゃんを見つめて頭を優しくなでた。

「君はこどもだからできる事が限られているけど、思い出せば何かあると思うよ」

「さくらにできる事？」

「例えば友達がいらない子と友達になるとか、人見知りな子に優しく話し掛けてみるとか」

「他の人から見たらそれはとても小さな事だけど、その人にとつたらとても大きな事なのかな」

「そうだよ。人それぞれ幸せって感じるのは違うし」

「皆仲良し、仲間、お友達、手を繋ごう」

「そうそう」

「笑えば嫌な事も忘れる、笑えば嫌な事も耐えられる、笑えば皆幸せ！」

さくらちゃんと藤井さんは笑っている。

「でもさ、藤井さん。病気の人や貧乏な人を幸せじゃないって決め付けるのはよくないよ」

目に涙を浮かべながらさくらちゃんは言った。手は震えています、プルプルプルプル、二人しかいないこの空間はぴんと張り詰めています。その時汽笛がポーッと鳴りました、静かなここにはその音が聞こえました。子供たちが騒いでいる車両には聞こえません。

「さくらのね、親友のまみちゃんが、病気でさ。一年前の健康診断でわかって、それからずっと入院してるんだよね。心配だからお見舞いに行っただけ。まみちゃん泣いててさ、声を出さずに泣いててさ、そんなまみちゃん見たら声かけられなくて」

プルプルプルプル、体も震えています。

「けどまみちゃん私に手紙にくれたの。まみはさくらちゃんがいるから頑張れる、親友のさくらちゃんがいるからまみは幸せ、お見舞いに来てくれたのにゴメンね、今度は大丈夫だからいっぱいお話しようねって。私は、傷付いたらどうしようかと恐くて遠ざかるうとしていたのに、まみちゃんは私を求めていた……」

押さえきれず涙がほろほろと落ちる。ソレは夜空で光るお星様よりずっと綺麗で、ダイヤモンドより輝いていて、心に伝わるモノがある。

二人の様子に気付いた一人の車掌さんは、握りこぶしをつくっていていた。今にでも殴り掛かりそうな、そんな感じさえする。しかし女の子と手を繋いでいる車掌さんが肩を軽く叩いた。

夢列車は楽しむだけじゃない。心を強くして成長するところでもある。私達もそう、子供達と一緒に成長するの。もう遅いかもしれないけどね。

その言葉が何なのかが全くわからない女の子は、お口をチャックして待っていた。

「僕も泣きたいよ、夢列車に乗車する代償として無くなったんだから」

藤井さんは両手をお面に、そして外しました。お面はそこら辺に投げ、お面は床に寝転びました。

「見て？ 驚くけど見て？ 恐かったら僕と出会った記憶は消すからさ」

「いや、絶対見ない、藤井さんの事恐くなる！」
首をぶんぶん左右に振っているさくらちゃん。涙は左右にとびます。

「僕はもう生まれ変わらなくても良いと思ってたんだ、でも信じら

れる友達がいるから乗り越えられそう、一人じゃ心細いけど仲間がいるから恐くない」

フフフと笑う藤井さん、涙をハンカチで拭いてお面を取った藤井さんを見るさくらちゃん。普通ならその様を見て気分を害し口を押さえたり、夢に出てきたらどうしようと思っただけ泣きだしたりするけどそんな事一切なくて彼を見て笑っている、小さな手が大きな手を優しく擦る、藤井さんは涙を流しながら笑っているような感じがした。

さくらちゃんと藤井さんを心配している先程の二人の車掌さんは、もらい泣きをして子供たちに笑われている。大人なのに泣くなんて恥ずかしいよって。

さくらちゃんは藤井さんの頭をなでます、やさしく、やさしく。

「僕は死んだ、でも神様が消えるはずのこの魂を救ってくれた。生きてる時は人様に迷惑をかけ、後ろ指を指され、逃げるような転々とした毎日だった。人なんて嫌いだ、もう関わりたくない、そう言い残しこの身を……」

夢列車は哀れな魂を成長させる所。哀れな魂はそのままじゃ消えていくけど、神様に救われた魂は輝く。代償として大切な物が無くなるけど。

純粋な子供達と触れ合い、忘れていたモノを思い出し心にそっとしまい来世へ向かう準備をする。次は幸せになれよ、頑張れよ、もうここに二度と来るなよ、神様が背中を力強く押してくれる。

「泣いてスッキリしようよ、恥ずかしくないから」

ポロポロ、床に涙が落ちました、ポロポロ、次から次へと、ポロポロ、止まりません。

さくらちゃんはノートに何かをかいています。赤や青や白、色鉛筆で色も付けます。顔の無い車掌さん、藤井さんは大泣きしています。それはまるで赤ちゃんのようにです。

夢列車

そうして夢列車は星空の中に消えていった。

さん

ジリリリリ

目覚まし時計が鳴り、今日がスタートします。

外から太陽のあたたかな光が入ってきて眩しい。チュンチュン、と小鳥は朝から歌を歌っています。バイクに乗ってポストに新聞を入れているお兄さんは目を擦りながら頑張っています。愛犬と散歩をしているおじいちゃんは嬉しそう。体操服姿の少年と少女は食パンをくわえながら走っています。公園ではラジオ体操が始まりました。さあ！ もうお目覚めの時間ですよ。顔を洗ったらネムネムは吹っ飛ばから、早く起きましょう！ ニワトリの皆さんはもうとつくにコケコッコって鳴きましたよ、その数分後赤ちゃんの泣き声が聞こえましたよ。

……。

あれね。ベッドにさくらちゃんがいませんね、トイレに行ってるのかな？ 朝のジョギングしてるのかな？ ひよっとして朝ご飯作ってた？

するとその時、一階から声が聞こえた。美味しそうなおいと一緒。

「ママお早よう！ 今日玉焼き作ってるよ」

「……熱でもあるの？」

「違うよ。さくらが作ったら、皆ニコニコしてくれるかなと思って」「そりゃあさくらが一生懸命作ってくれたら皆喜ぶけどさ」

「ママ！ そんな所に突っ立ってないで、早くパパとおばあちゃんを起こしてきてよ！ さくらの愛情をいっぱい詰め込んだ目玉焼きが

冷めちゃうから！」
「わかりました〜」

勉強机の上には一冊のノート。そこには笑顔で泣いている車掌さんの絵が描かれていた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832c/>

夢列車

2009年6月27日05時20分発行